

第10章はリアウ州泥炭地帯の降雨パターンの特徴と地下水水位変動を観測した報告だ。降雨パターンの長期トレンドもさることながら、フィールドの雨量観測と地下水水位計測は泥炭の乾燥をモニターする上で重要な施設なので、多数設ける必要があるだろう。観測点の標高が泥炭地帯にしては高すぎるのが気にかかる。標高ベンチマークとの補正に問題がないだろうか。プランテーション内の地下水水位が水門操作で高く保ちうるというのは意味のあるデータだ。

第11章、第13章はゴム、アブラヤシ、アカシアの生産、その高いバイオマス生産を利用した小農経済の改善や、生活圏の景観を報告する。住民と企業の紛争を具体的に取り上げて、その中で土地所有権、森林基本法の問題点を指摘すれば、第1章の報告は判り易くなったのではないだろうか。

第12章は哺乳類、鳥類の観察を報告している。まとまった面積の天然林を残すことがよいというのは予想できることだが、粗放管理のゴム園が多様性保全に有効という発見は面白い。泥炭分解を抑える実際的な関心からは、生息する昆虫や腐朽菌の比較が必要ではと思われる。

現在熱帯泥炭が世界の注目を集めているのは、その炭素蓄積量が膨大で、排水・開発すると放出される炭酸ガスは膨大な量にのぼると推定されるからだ。しかしこれらの推定には多くの仮定が含まれ、仮定を確かめることは置き去りにされている。泥炭地の面積や厚さ、仮比重、内部の構造について情報の向上が求められている時点だ。本書はその進展に刺激を与えるものだ。また企業と研究者が環境保全意識の共有に努力した点で大きな時代的意味がある。

(古川久雄・京都大学名誉教授)

太田 淳、『近世東南アジア世界の変容——グローバル経済とジャワ島地域社会』名古屋大学出版会、2014、ix+505p.

18世紀東南アジア社会は、「交易の時代」のあとの衰退期とみなされがちであるが、同世紀中葉以降の対中国貿易の発展とともに経済活動を活性化させた地域像が、近年提示されている。本書も、

胡椒生産地であったバンテンの内陸部やランボンが、この時期バンテンのスルタンやオランダ東インド会社の権力を活用しつつ、同時に他勢力との関係構築を試みる活力に富む社会であったことを明らかにする。

バンテン史研究は、従来港市バンテンの研究に集中しており、胡椒を生産した内陸部やランボン社会の動向、さらにこれらの地域と港市コタ・バンテンとの関係は、あまり検討されてこなかった。そのため18世紀のバンテンのスルタンの権威衰退やオランダ東インド会社の経済的不振により、これらの地域も停滞したとみなされてきた。これに対し本書は、バンテン内陸部やランボンが、スルタンやオランダ東インド会社だけでなく多様な外来勢力と交流することにより、18世紀においても活発な経済活動を行なったことを論じる。豊かなオランダ東インド会社の文書を駆使して、近世西ジャワ社会がいかに近代に移行していったか、当時のグローバル経済のなかで位置づけた試みである。

本書は全体で、序章と八つの章と終章の構成よりなる。序章で問題の所在を提示したのち、第1章「基層の歴史——環境、人口、経済」で、バンテンがジャワ人移民を中心に灌漑稲作を営んだ海岸部社会と、焼畑耕作を基盤に胡椒を生産した山麓ならびに河川上流盆地に、生態環境が分かれることを指摘する。バンテンは1684年にオランダの影響下におかれたが、それまでは、胡椒を搬出した一部の地域をのぞき、スルタンは大部分の内陸部やランボンに影響力を行使しておらず、むしろ18世紀中ごろまでは、バタヴィアをはじめとする海岸部の諸港市と関係が緊密であったことを明らかにする。

第2章「支配のイデオロギーと構造——王権、社会、イスラーム」は、バンテンの王権を支えたイスラームの特質と王国の支配構造を描く。筆者は1732年編集の『サジャラ・バンテン』の写本をベースに、バンテン王国の建国者ハッサヌディンが、土着信仰やヒンドゥーをとりこみながら、現地社会で調停者としてその権威を構築したことを論じる。バンテン宮廷は1700年前後に幾つかの土地台帳を編集し、王国をスルタンを頂点とするピラ

ミッド的構造に位置づけようとした。スルタンと地域住民との間には、ポンゴウォという有力首長が介在し、そのもとに村落の首長や住民が存在した。スルタンはポンゴウォに称号やレガリアを授与して、彼らの影響下にある住民に胡椒栽培を行わせ必要量を搬出させようとした。またランボンへも宮廷役人を派遣した。こうした状況下、バンテンの内陸部でジャワでは特例的に、栽培者個人に開拓地の土地所有権が認められたことが提示される。

第3章「バンテン反乱 1750-52年」は、18世紀前半期にオランダとの関係を強めて王国の女性摂政となった、ラトゥ・シャリファ・ファータイマの退位を求めて起こったバンテン反乱を取り上げる。反乱の二人の指導者の一人キャイ・タバは、聖山とされたムナラ山で修行を積み、自らがオランダに追放されたジャカルタ王の末裔であると称し、オランダがバンテンを去ることと、彼がバタヴィアを支配することを唱えて信奉者を得た。またラトゥ・バグス・ブアンは、スルタン・アリフィンの従兄弟バネンバハン2世の血縁者とみなされた。彼は、胡椒産地のチャリングンの後背地で人々の支持を得、バンテン王国の支配者となることを唱えた。食糧を豊かに確保した反乱軍は、50年の11月には王都制圧を唱え、シャリファを退位させ、12月から翌4月まで王都の周辺を主要戦場に巻き込んだ。反乱軍は最終的に、東インド会社軍やそれと合流した地域有力者の軍に駆逐されたが、反乱をとおして、スルタンから地方有力者を經由して地域社会の人々を結ぶ象徴的なつながりが、動揺したことが論じられる。

第4章「共栄の時代——スルタンとオランダ東インド会社の蜜月、1752-70年」は、オランダがバンテンのスルタンの上位支配者となる代わりに、スルタンが胡椒を栽培者と会社の間で独占的に仲介できる条約を1752年に締結したことで、1770年までスルタンとオランダの双方が繁栄の時期を迎えたことを描く。会社は胡椒供給を安定的に確保するために、ランボンの要所にポストを設置し、地域紛争の調停にも介入した。ただし住民にとってオランダは、パレンバンやイギリスなどと並んで状況に応じて協力する外部勢力の一つだったこ

とが明らかにされる。また中国とヨーロッパで胡椒需要が増加し出すと、会社は1761年以降、胡椒栽培促進政策のために宮廷官吏に会社職員を同行させ、バンテン内陸部での胡椒栽培の視察を始めた。会社は、ポンゴウォよりも直接的に栽培を監督できる「村落」首長を重用しようとしたが、バンテンにおけるポンゴウォの力は強く、胡椒栽培の促進が結果としてポンゴウォの影響力を増大させたことが論じられる。

第5章「スルタン統治の終焉——王権の衰退と地方のダイナミズム、1770-1808年」は、ランボンからの胡椒供給の衰退やコタ・バンテンの港の機能の低下、イギリスの攻撃に対する軍備などの要因によりスルタン財政が悪化し、弱いスルタンを支えようとしたオランダの政策がさらに宮廷勢力の離反を招き、スルタンの権限が衰退したことを明らかにする。その一方で、バンテンのポンゴウォたちは胡椒栽培をとおして地域社会における影響力を拡大し、なかには水田耕作を開始し、米を輸出する者も現れたことが論じられる。ポンゴウォの影響力の増大により、課される強制的義務を嫌い逃亡する農民も増えたが、総じてバンテンの住民が市場志向性を強めたことを指摘する。中央の王権衰退を王国全体にあてはめ、この時期をバンテンやランボンの衰退期としてきた先行研究に警鐘を鳴らす。

第6章「海賊と貿易ネットワーク——中国—東南アジア貿易の拡大の中で」は、1760年代以降のランボンで頻発した「海賊」や「密輸」を、当時発展していた中国向け貿易の一環として論じる。18世紀の清朝下の中国の消費者社会の発展は、東南アジアの錫、胡椒、海産物や森林生産物の輸出を増加させた。マラッカ海峡域では1787年にオランダがリアウを追放されて以降、リングのスルタン・マフムードがブギス勢力やシアクのサイド・アリと結び、周辺地域への海賊行為をしかけた。海賊活動により略奪された商品は、カントリー・トレーダーズや華人商人に取引されたことが明らかにされる。1790年代イギリス、オランダ東インド会社による胡椒受給が大きく減少したが、広州における胡椒取引では、華人商人やカントリー・トレーダーズが果たした役割が大きかった

ことを、統計資料から説得的に論じる。

第7章「糖業の展開と境界社会の形成——華人移民のインパクトと越境貿易」は、18世紀終わりに出現した、バンテンとバタヴィアの周縁地域の砂糖栽培が展開したサダネ川流域の移民社会をとり上げる。バタヴィアの郊外（オンメランデン）の砂糖栽培は、18世紀の後半には燃料用の薪を得られるオンメランデン西部、サダネ川流域、バンテン東部に移動した。過酷な砂糖生産労働の疲れを癒すアヘンは、オランダ東インド会社の独占取引がなされていた。しかし、イギリスが1780年代インドにおけるアヘンの生産と貿易の支配を強めると、オランダは生産者からアヘンを直接入手することが困難になり、イギリス当局から高い値段で購入することを余儀なくされた。当初オランダからアヘンを購入した華人商人たちは、これを避けてイギリスとの非公認貿易によりもたらされる安価なアヘンを、バンテン沖の島々やサダネ川沖のブラウ・スリブなどで買い付け、サダネ川流域にもたらした。サダネ川流域のタンゲランやグレンディンが、コタ・バンテンやバタヴィアが人口減と経済活動の低迷に苦しんだのと対照的に、アヘンなどの必需品を安価に供給し、経済活動を活性化させたことを論じる。

第8章「植民地国家の構築——統治の浸透と限界、1808-30年」は、1808年から30年までの村落まで取り込もうとした統治が、反発を招き、強制労働からの逃亡者たちが抗争と合流を繰り返し、ジャワラ集団（ローカル・ストロングマン）が地方において強大化したことを明らかにする。1808-11年のダーンダルス治世からイギリスのラッフルズの統治（1811-16年）さらにその後のオランダ植民地政庁の政策により、バンテンのスルタンは廃絶され（1813年）、この地域は西ジャワ州に編入された。州の下に県、県の下にさらに郡や副郡が設けられた。オランダ植民地政庁は、既存の地方有力者を体制に取り込むのではなく、信頼に足ると判断した人物をそれらの職に任命した。また住民は地代の金納化を義務付けられた。既存の地方有力者や王族は、これらの政策に激しく抵抗し、地域に騒乱をもたらした。こうしたなかで、ジャワラ集団が地方の政治抗争で重要な役割を果

たし、人々が植民地体制による社会の改変を表面的に受け入れながらも、その一部を無効化し、彼ら自身の安全と利益を確保するインフォーマル・システムを構築したことが示される。

本書は従来議論されてきた、17世紀の港市国家バンテンの隆盛と19・20世紀の植民地体制下で反乱が頻発した社会の間をつなぐ、意欲的な研究といえる。18世紀後半から1830年にいたるバンテン内陸部とランボンの社会が、経済的に停滞していたのではなく、自発的に世界経済と結びついていったことを論じる。当時のマラッカ海峡域の動向とも関連させつつ、バンテンの人々がいかに近代を生み出したかに迫っている。また18世紀の西ジャワの後背地社会の実態を明らかにしたことは、東南アジア史研究に新たな光を投げかける。小人口社会として語られてきた前近代の島嶼部において、土地所有の観念を形成させた興味深い事例を提示する。個々の章で提示された議論は斬新で、かつ全体として目指したテーマを効果的に追跡している。

課題として浮上するのは、18世紀内陸部の住民がいかなる世界観や価値観を構築したかということである。本書はスルタンが首都から内陸部にまで一定の権威を行使したことを論じつつ、スルタン権力のみ依存しない内陸民の多様な姿を描いている。港市支配者の内陸民への権力行使を、内陸民が彼らの観念のなかでいかにとらえていたか検討することが必要となろう。ここで興味を惹かれるのが、内陸民が港市支配者を同じ内陸部出身の血縁者とみなし、自らを土着先住民と位置付けた語りが、近世後期から近代にかけてスマトラ島などの島嶼部の後背地で記録されていることである。これらの語りは、土地の耕作権や所有権と緊密に関連している。本書の事例を、プリアンガンや中東部ジャワとともに、スマトラのガヨやバタックさらにミナンカバウの事例と比較するとき、港市と後背地をめぐる議論に少なからず寄与するものとなろう。

（弘末雅士・立教大学文学部）